



Lyrics/Yuna
Kannami



神波 由那

目次

夏の鼓動	1
Brand new time	2
虹の橋	4
君をこの腕に	5
明日が見えなくても	7
Move on	10
自墮落な石ころ	11
in the sky	13
you do not know	15
風を待つ	17
ひとつの夢	19
Losing You	20
熱身体	22
Reason to live	24
Homecoming song	27
Slight inflammation	29
follow me up	31
I wanted love	33
Broken life	35
Now day-to-day	37
Dina	39
愛されたい	41
Memory of rock 'n' roll	43
Kill me thinking about you	45
final trip	47
さよならの味	49
Runaway	51
one woman and one man	53
今年の夏はもう二度と	55
In a new city	58
作詞	60

奥付

夏の鼓動

夏の鼓動

その痛みを感じながら知る

去り行く予報

それに疑う余地もなく

熱を帯びた

愛という名の終焉

影を伸ばした

太陽と共に沈む

Stay これ以上行かないで

違う日々を歩まないで

今日という同じ日を

僕等が共に生きるように

君の鼓動

それを知る術もないまま

離れた指が

道しるべを知るのかな

過ぎ去りし よぎる思い出は

目の前の海岸に 打ち寄せる波のよう

Stay これ以上行かないで

刻む時が辛くとも

背中を追う事や仕草を見つめる事が

夏の終わり

この願いは 届かない...

Stay これ以上望めない

これ以上 愛されない

今日という同じ日を

僕等が共に生きるようには

夏の鼓動...

Brand new time

そんな落ち込むなよ そんな考えるなよ

バイオリズム通り山あり谷あり

人生なんてさ 多分誰もさ

いつだってその繰り返しだろう

皆を失ったなんて 思わなくていいんだ

一人じゃないんだしだから繰り返し 生きてるよ

今感じてる Brand new time

新しい扉が開く時 いつか見た夢や目標に歩いていけるはず

始まっている Brand new time

きみの手をとってさあ行こう

素敵な宝物を楽園へと探検をはじめよう

さあ、立ち上がって

悲しむ思いや 涙声は

誰しもがきっと似合わないけどそういう時もある

だけどそれを乗り越えた分だけ

きっとよろこびと笑顔は宝物になるだろう

答えはもう見つかっているんだろう？

夢の先がどこなのか君が一番知ってる

これからの Brand new time

自分らしく生きるため 眠ったままの本能を蘇らせよう

高鳴っていく Brand new beat

眠っていたその鼓動が 確かにそれを感じているだろう

今新たな道へ

ずっと歩いて行こう ずっと走って行こう

時には立ち止まってまた動けばいい

過去は気にしないで今日から明日を見つめよう

今感じてる Brand new time

新しい扉が開く時いつか見た夢や目標に歩いていけるはず

この場所から Brand new start

人生はきっと面白い

悲しみより涙よりそれはもっと大きいはず

さあ行こう...

虹の橋

まるでぐしゃぐしゃの雑巾のように

ひたすらに心に雨が降りしきる

この暗闇に打破する力がなくて

ずっと途方に暮れる様だったんだ

そして雨上がりを待っている

架かる虹の橋を待っている

僕らが待ち焦がれた 希望の空がそこにある

まるで水たまりにはまるかのように

がんじからめで動けない日々

そして夕焼けを待っている

架かる虹の橋を待っている

湿りきった全てを 洗い流す虹を待っている

僕らは雨上がりを待っている

架かる虹の橋を待っている

肉体や精神のあらゆる癒やしを得るためなんだ

君をこの腕に

真夜中 月明かりの下 携帯を持ったまま

何が起こったのか理解出来ないでいる

二人の間の距離感

僕の中での虚無感

君の中での存在感

全ては始まりと終わりで

何かが変わっていくなかで

分かっている もう戻らない 過去へは帰れない

それでも君をこの腕に抱きたい

名前を呼べば振り返るような

届かぬはずもないのに

それでも君をこの腕に

聴くことすらないのに君のボイスメールに

メッセージを REC している

東の空は白むのに 心は日が落ちるようだ

繰り返したよ 今までも 過去の別れはいつも

それでも君をこの腕に抱きたい

もう一度 振り返るような

そんな気がしてならないんだ

そう今君をこの腕に抱きたくて

初めて抱きしめたあの時のように

記憶がスリップしていくよ

あの時感じた温もりを君の全てを

君の全てを...

分かっている もう戻らない 過去へは帰れない

それでも君をこの腕に抱きたい

思い切り叫んだら君に届くような気がして

今君をこの腕に

君の全てを...

明日が見えなくても

眠れない夜 朝を待ちたくて

僕は離れていく

跡形もなく 跡形もなく

僕は旅立っていく ye ye

静かな夜が明けたら

何も見えなくても

明日が見えなくても

何かを考えなくても (将来) どこかに転がってる

とても忙しそうな (人々) 横目にしては

何でも取り巻く問題を (共に) 戦ったけど

寧ろ得られるヒントは

影をぬけ出した光に在るはず

だから旅立つんだ ye ye

闇を切り裂いて

光輝いた ye

そのパンドラを探しに

眠らない夜 朝を迎えたくて

この街を捨てて

見ぬことのない明日へと

色んなものを漁ったよ家族や友人達と

色んなものを失って 気づいた 愚かさ

誰も止めやしないだろう？（止めない）

信じるものだけを

胸に抱いてただ今は待ってる

今夜を乗り切る時を

僕は旅立っていく ye ye

不気味な静けさも

僕には希望に思える

真っ暗な空

眠れない夜 朝を待ちたくて

跡形なく消えて

まだ知らない明日へと

眠れない夜 朝を待ちたくて

僕は離れていく

跡形もなく 跡形もなく

僕は旅立っていく ye ye

静かな夜が明けたら

何も見えなくても

明日が見えなくても

だから旅立つんだ ye ye

闇を切り裂いて

日が昇る時は

知らない運命の始まり

Move on

深夜にうろつく街を歩き回って 僕のホントの居場所は何

部屋はあるけど どうも落ち着かないでいるんだ

Move on Move on やるせない

何処を辿っても同じだ

普通の道も、僕の道も まだ先が見えたもんじゃない

そんなある日きみを見かけた 声をかける暇もなく

なんだか忙しそうに 元気でやっているのに比べ僕は

Move on Move on せわしない

誰もフォロー出来ない生活

僕の道、僕の目的 動いてみつけたい

Move on Move on やるせないけど

皆を追いかけて皆に追いついて 何かを剥き出しにすれば

先がみえるのかなきっと

普通の道も、僕の道も、まだ先が見えたもんじゃない

自墮落な石ころ

誰かが僻みで文句を言う

皆が妬みで傷をつける

それでも僕は信じている心を

それから燃やされてしまうんだ

灰色に千切れた僕は踏みつけられている

立ち上がれない姿はまるで

自墮落な石ころだ

墮ちていく石ころだ

誰かが言った集会所は

なんだか薬物倉庫のようで

彼らはそこで精神さえも

粉々に砕き始めるんだ

嵐の夜の中散らかる残骸に

このまま埋もれるしかないのだろうか

教えてくれ

こんな僕に

墮ちていく、自墮落な石ころに

もし立ち上がる術が残っているのなら

もう一度だけ戦う為に拳を握りしめる

くそくえな奴に投げつけてやるんだ

自墮落な石ころを

墮ちていく石ころを

in the sky

そっと目を開けて 見上げれば 何処までも続く空

抱きしめて 僕をみて

全ての愛情を注いであげたい君に...

僕自身の中の 内側の感情に

愛と芽生えた想いは狂気さえも感じる oh

それでも孤独をひたすら恐れて

痛みのない優しさを求めている

ぐっと身を寄せて信じて欲しい この青い空の下で

抱きしめて この願いを叶えて欲しい

君の答えは？

僕が持てるだけの 力を振りしぼって

もっと守りたくなるような 心境さえ抱いている

僕自身の中の 君への感情を

伝えたい だから手を伸ばして

そっと目を開けて 見上げれば 何処までも続く空

come on 光の下へ この愛を君に注ぎたい

抱きしめて 僕をみて

君の持てるその愛情を 僕に...

you do not know

あなたはこの気持ちを どこまで知ってるの

わたしはこのジレンマを 感じているの

そう、声が聴きたいと思ったり 会いたくて仕方ない程の心を

you do not know その微妙な距離で伝わることすら怖くて

でも止まらない 口から出そうな告白をしまったまま

心変わりも たぶんまだしない 一度だけのチャンス

もどかしい思いは前進しない 不甲斐ないジレンマ

そう、君がいてくれたならばいいのに

そう、君に触れられたら叶う願いなのに

you do not know この微妙な距離を行ったり来たりする心は

いつの日か装っていたとしてもこの心は伝わるのでしょうか

もっと二人が近づくごとに あなたのことを知りたいと思う

さらけ出しても構わない

you do not know その微妙な距離で伝わることすら怖くて

でも止まらない口から出そうな告白は しまえないまま

伝えて受け止めてくれますか

まだ気づかないこの微妙な距離を行ったり来たりする心は

いつの日か装っていたとしても気持ちを伝えられますか

風を待つ

最後に見た君の姿は 今も僅かながらの Memorys

帰ることなく 残るのは記憶

あの場所からの 風を待ってる

その便りが 届くまで

君をもう見つけられないから

心の雨に 君が映る 忘れないままの笑顔をたたえ

けれど声は 聞こえぬまま

別れる事は互いの言葉を忘れること

そう、残酷で そう、現実

あの場所からの 風を待ってる

その便りが 届くまで

どんなに強く肩を吹き抜けても

いまここで 風を受けてる

戻らない人の 便りを待ち

君をもう見つけられないから

どんなに強く肩を吹き抜けても...

ひとつの夢

ひとつの夢 この国なら夢でもない事

でも彼女達には遥かな夢

(そうこの国なら当たり前の事は)

(遥か遠くの少女たちの夢)

途上の国の中幼い少女は

恋も知らぬまま 学校にも行けぬまま

人生を潰されてる

働く事も 学ぶ事もこの国なら当たり前の事だけど

海の向こうの何処かの国では 少女は売られていく

言われるがまま嫁がされ 見知らぬ男の子供を宿す

働き手が無いとみなされ 夫には捨てられていく

世界中の女の子は恋もしたいし学びたいだろう

でも遥かどこかの国ではそんな夢さえ叶わない

地球上の男女が平等で在るためには 何が出来る？

世界中の人々が世界中に目を向けられたら

床に落ちていたそのコイン一枚だけでも

ひとつの夢をひとりずつ叶えてあげられるんだ

有志よ目覚めて 有志よ立ち上がって

ひとつの夢 限りない夢 大きな夢に

有志よ立ち上がれ

Losing You

木枯らしの季節が過ぎて 風は酷く冷たい

けれど街は1年で1番華やかで

君と歩くはずだった Pavement

思い出振り返りながら

けれど部屋にいる君はどこか

虚ろげな横顔

どうか教えてくれないか その表情の訳を

僕には尋ねられない その向こう側の答え

もう術はなく君を失っていく

喧嘩をしたりする度にいつしか すれ違っていたね

大人になるにつれて 道を外れて

それぞれの生活それぞれの関係

時間や季節が過ぎるのは残酷なのかい？

どうか教えてくれないか その表情の訳を

黙ったまま部屋を出ていかないでくれ

もう笑顔を見れず 君を失っていく

どうせ教えてくれるならその表情の訳を

どんな理由でもいい この先も見守っている

どうか教えてくれないか

僕には尋ねられない その向こう側の答え

もう術はなく君を失っていく

もう笑顔を見れず

君を失っていく...

熱身体

なあ、どうなんだい

僕の頭はまた原理から離脱していくのか？

反逆の嵐からまた逃げて 記憶から抹消すればいいのか？

お前の目をまざまざと見れば せせら笑いの僕

欺いて妬んで僻めばそれで満足かい？

影で言わせておく輩からおさらばしよう

熱の籠ったこの身体で全て焼却すればいい

あきれたもんだな

人間の精神は決しておもちゃなんかじゃない

表面は取り繕って影で弄ぶなんてやるもんじゃない

地位や名誉 見た目や平凡それがどうした

自分が他人より可哀想だなんて比べてないかい？

真の価値もない大人からおさらばしよう

熱の籠ったこの手のひら挙げて追い払えばいい

熱の帯びたこの身体で跳ねのける

何にそんな嫉妬したいんだい 誰がそんなに羨ましいんだい

何をどれだけ比べたいんだい

下らない思考の退屈だ

影で言わせておく輩からおさらばしよう

熱の籠ったこの身体で全て焼却すればいい

Reason to live

時々こんな事を考える

何を持ってして生きているのか

時に全てを捨てようとして

時に記憶を消したくなる

或いは故郷を追い出されて

なぜこの場所に立ち尽くすのか

他の居場所を探そうと

もがきながらも過ぎていく日々

Ah Reason to live 生きていく意味は

ずっと探し続けていくのだろう

死ぬまで無意識のまま

Ah Reason to live

自分を保護して欲しい訳じゃないけれど

幸せの形すら持ってはいない

恋人や家族もいないままで

孤独にすれど嘆いちゃいない

自分の中に溜まった瓦礫や埃

振り払いながら吐き出す日々

生きているうち苦勞は必要だ

その先に喜びは控えている

Ah Reason to live 生きていく理由は

ずっと確かめていくのだろう

死ぬまで無意識のまま

それが Reason to live

倒れないように 倒されないように

絶えることのないように

何も犯す事をしないならば時間として必要なもの

生きるために必要な時代に

必要なだけ生きる時間が在るはずなんだ

そうだろう？

Ah Reason to live 生きていく意味は

ずっと探し続けていくのだろう

死ぬまで無意識のまま

Ah Reason to live

Ah Reason to live 生きていく理由は

生きていくからこそあるのだろう

どんな道を選択しようとも

それが Reason to live

Homecoming song

昔から描いていた 夢見がちな夢に

ただひたすらに走り続けてきた

けれど成功や名誉を得た時に

いつの間にか帰るのが怖くなっていたんだ

捨ててきたあの街

逃げ出した懐かしい街

もう一度、愛する人の元へ戻ろう

だから歌う 僕は口ずさむ

Homecoming song

鍵を開けて待っていてくれと歌う

Homecoming song

銀幕が滑り落ちて

僕は光を浴びる

あらゆる賞賛を得るかも知れないけれど

その代償に切り刻まれた 破れた本のページを

繋いで貼ることも必要だった

今 僕は行く

愛する家族を求めて歌う

Homecoming song

笑顔を讃えて僕を待つ人に

Homecoming song

だから歌う 僕は口ずさむ

Homecoming song

鍵を開けて 待っていてくれと歌う

Homecoming song

Slight inflammation

誰もいない 誰も来ない

部屋の中で埋もれる

吐き出す術もない孤独

どんなに悪い事が起きても

叫べない 闇の中で

消えそうな僕の Slight inflammation

ちっぽけな僕の影を映す

消えてしまいそうな Slight inflammation

誰にも何も言えないままで

侵食されていく 蝕まれた身体

まるで廃人みたいだ

外の光さえ遮断する そんな閉じこもり方

起きれなくて闇の中で

消えそうな僕の Slight inflammation

泣けない辛さの影を映す

消えてしまいそうな Slight inflammation

泣いたらもっと悲しくなるんだ

叫べない 闇の中で

消えそうな僕の Slight inflammation

ちっぽけな僕の影を映す

力尽きそうになる Slight inflammation

また明日の空を見ぬまま...

follow me up

いつだって中途半端なままで浅く広い くじけてしまう

飽きっぽいとでもいうのか 叱咤されたところで

きっと僕は自分自身に気づかないまま

墮落に過ごしてるんだろう

僕に出来ることって何だい？

プライドを賭けてでもやり遂げられる事を探してる

他人頼りじゃないんだけど教えてくれないか

follow me up, follow me wake up

どんな答えでも受け入れるから

右へ習えってお手本があるだろう そうガキの頃に

憧れたミュージシャンもいるだろう カッコよくなりたくて

理想が高いのだろうか それとももがいてるだけなのか

分からない事が多すぎるよ

その場でニヤついていないでちょっとぐらいは

バカにしてもいいから言ってくれないか

follow me up, follow me wake up

他人頼りじゃないけど教えてくれないか

見えないもの言われて気づくもの

自分自身が見えるその一言を

「きっと出来るから大丈夫さ」

「こうだからお前はダメなんだ」

なんだって構わないんだ

僕が起き上がる何かなら

他人頼りじゃないんだけど教えてくれないか

follow me up, follow me wake up

どんな答えでも受け入れるから

follow me up, follow me wake up

他人頼りじゃないけど教えてくれないか

見えないもの言われて気づくもの

自分自身が見えるその一言を

I wanted love

そこそこ暮らせて 生活にも困らない

十分なはずなのに僕には誰もいない

仕事なんて順調にいついても

倦怠感や 疲労感は僕を孤独に蝕むんだ

この先生きて行く先 何が待ち受けているのだろう

僕は親しい全てを無くした

親しい人全てを

I wanted love,I wanted love

そう最近将来について 何となく考えるんだ

誰もいない今僕に寄り添ってくれる人がいるのかと

僕は誰なんだ？ 誰になりたいんだ？

必要とされ必要とするものはあるのか？

全てが消されて行く恐怖感を覚えながら

それでも強くいたいんだ

自分の鏡に 決して映さない

泣き顔を 情けない顔を

これ以上見つめていたくはないんだよ

この先生きていきたいよ 何が待ち受けても

失うものはもうないのだから

這い上がるしかないんだ

この先 生きて行く先 何が待ち受けているのだろう

僕は親しい全てを無くした

親しい人全てを

I wanted love,I wanted love

Broken life

ずっと一緒だと ずっと続くだろうと 思っていた友情

恋人にならなかったのは それが理由だった

喧嘩をした時全てを焼いた 君の手紙

あの時の事を今でも後悔するわたしがいる

なぜ去ったの

命を絶ったの

不条理だとしても

君に生きてほしかったのに

人気者だった皆が集まる場所の裏で

悩んでいたのは分かっていたのに

なぜ旅立ってしまったのだろう

君の Broken life

君がいなくなったと聞いたその時

狂ったように気違えたかのように部屋を漁った

もう残ってないと諦めかけた形見は

初めて話した時君が抱えてた

真っ赤なギブソンを弾いてる写真

いい人程才能の溢れる人程

早く逝ってしまうなんて不条理過ぎやしないかい

I can't my dreams

せめて夢に出てきて耳元で励まして

頑張れよと言って欲しいんだ

君の Broken life

君が抱えてた

真っ赤なギブソンを弾いてる写真

沢山の音楽と思い出

分かち合った友情に心の友よ

天国であのギターを弾いていますか

なぜ旅立ってしまったのだろう

君の Broken life

Now day-to-day

昔砂利道を蹴った日々を覚えているかい

あの頃はただはしゃいでは何も考えちゃいなかった

そして大人になってスレ違いが生まれて

もう以前のようにはいかないね

雨の降りしきる中後悔か回想するように

傘もささないままで 歩き続けていた

見届けられなかった母はいつも言ってた

きっと星が守ってくれると

きっと祈りが天に通じていくだろうと

Now day 星は遠すぎる

だけど 手を伸ばしたいよ

くじけて 凹んで 落ち込んでいても

僕は僕であるから変わりはない

だから夢をみている to-day

とある奴は怪我をしたんだ

どうしても飛べるんだって信じこんでね

だからって責めるつもりはないんだ

夢なんて下らなくてもそれは立派だと思うんだ

Now day 道は長過ぎる

だけど 歩き続けたいんだよ

止まっても うずくまっても また歩けばいい

僕は僕であるから信じればいいんだ

だからまた歩き出すんだ to-day

そう、僕は僕の責任そう、僕は僕だけの時間

例え誰もいないとしたって

僕以外の誰も罰を受ける事はないんだ

Now day 星は遠すぎる

だけど 手を伸ばしたいよ

くじけて 凹んで 落ち込んでいても

僕は僕であるから変わりはない

Now day 道は長過ぎる

だけど 歩き続けたいんだよ

止まってもうずくまっても また歩けばいい

僕は僕であるから信じればいいんだ

だからまた歩き出すんだ to-day

Dina

過去の アルバムを紐解いて

君を無意識に探しても戻れない

少年だった僕の心を

風のようにすり抜けた

君が今でも恋しくて

Dina Dina 戻れなくても

Dina Dina さよならの時は過ぎたのに

何かが 引っかかった糸のように

何かが 起きれば君を思い出した

届かなかったものを

僕はまだ追いかけている

下らない そう思われても

Dina Dina 戻れなくても

Dina Dina 時代なんてもう戻らなくても

Touch Me 誰よりも触れたくて

Hug you 誰よりも抱きしめて

Dina でも夢は終わったんだ

それでも僕は思うんだ

ただ君の幸せを

二度ともう 会えなくても

Dina Dina 戻れなくても

Dina Dina さよならの時は過ぎたから

Dina Dina もう 戻れないから

Dina Dina ふたりとも前を生きていこう

愛されたい

今眺めている川のほとり

移ろう景色はずっとずっとめぐっていく

木枯らしの風が華やかに変わり

イルミネーションを抱いて

恋人たちが肩を抱いて 幸せそうに歩く

嘘じゃないきみへの気持ち

いまでも僕は思う

温もりを手放したくない

君のその右手を

今でもきみに愛されたい

愛されたい

僕のこの思いの答えは

きみに届かないことだろうか

思わせぶりなそんな笑顔を

僕の記憶に残していかないで

忘れない君への気持ち

いまでも抱えてる

無邪気なその姿を

忘れたくないままで

もう一度会いたいんだと

きみを呼んでいる

今でもきみを抱きしめたい

抱きしめたい

これ以上思い出せないように生きれるのなら

楽なのにと考えるよ

変わることはないきみへの気持ち

いまでも僕は思う

温もりを手放したくない

君のその右手を

もう一度会いたいんだと

きみを呼んでいる

今でもきみに愛されたい

愛されたい

Memory of rock 'n' roll

路地裏に転がった空き瓶

粉々に砕けて 赤く染まっていた

まるで初めて出会った君が抱えていた

ギブソンのギターのように

今はもう腐ってかき鳴らすことも出来ない

君が張り替えてからこのままの弦は

Memory of rock 'n' roll

狂ったように歌を書いた

狂ったようにかき鳴らしたギター

何もかもを愛せていた時代

君との音楽も心も仕草も

ずっと離れないように 愛より友情を選び

生き続けるはずだったのに あの日から

Memory of rock 'n' roll

君との rock 'n' roll

君去りし rock 'n' roll

何故君の命が奪われたのか

自問自答しても答えは出ない

けれど僕は忘れない

君との rock 'n' roll

例え他の誰もが忘れても

Kill me thinking about you

貴方から来る密会のお誘いは いつも忘れかけている頃で

タクシーで向かうその先の扉で 出迎えるのはいきなりの Kiss

ゆっくり幕が下りるように 窓のブラインドが閉じられてゆく

あたし好みの薄明かりに 何故か貴方がふっと微笑んで

一言目はいつも「逢いたかったよ」

こころの中の 1 ピース

欠けてるところだけは多分同じだけど

Please, Kill me thinking about you baby

終わりのある愛だから

Please, Kill me, press it with a pillow ah baby

いつか終わる愛だから

二言目は服を滑らせて 耳元で寂しかったよと呟いてる

目をそらせてあたしは何も答えないでいる

貴方には帰るところがあるじゃない

きつく抱くその身体に

委ねて溶けていくあたしもあたし

Please, Kill me thinking about you baby

こんな日々が続いていくうちに

Please, Kill me, press it with a pillow ah baby

これ以上辛くなりたくないのに

愛してる誰よりも

背中から突き刺さるその刹那が

血を流せるものならばこのままいっそ息絶えたい

こころの中の1ピース

互いにはめあう意味は何

騙しあいだらけの世の中を

ただ映し合うような愛の欠片

Please, Kill me thinking about you baby

終わりのある愛だから

Please, Kill me, press it with a pillow ah baby

いつか終わる愛だから

Please, Kill me thinking about you baby

この愛とともに殺されよう

Please, Kill me, press it with a pillow ah baby

貴方の中で殺されよう

final trip

どこまでも続いている 白い世界の間の道を

僕等は最初で最後の旅をしている

今やっとやっと分かったことを言うなら

やっぱり君を愛していたんだ

君の愛しい切れ目が

君の愛しいその指が

見つめて触れ合っているうちに

忘れないでいられるようにかみしめよう

最初の旅、最後の旅

スタッドレスのタイヤで辿った道を巡ろう

好きだった歌を君がどんな下手に歌ったっていいだろう

現実をみたまま悲しみにくれないで 今はまだ 笑ったままでいたい

あの夏とは違う

君のフード姿

ひらひらと舞う雪を

忘れずいずっと僕はいるだろう

最初の旅、最後の旅

岬のてっぺんできつく抱き合っ 頬をはさんで

儚く白い結晶が舞う中で

さあ、最後の口づけを交わそう

どこまでも続いている 白い世界の間の道を

僕等は最初で最後の旅をしている

辿った道を巡ろう

当たり前を言うなら

やっぱり君を愛していたんだ

君の愛しい切れ目が

君の愛しいその指が

あの夏とは違う

君のフード姿

忘れずいずっと僕はいるだろう

final trip

さよならの味

何時もの儀式が終わるごとに 何時ものように背中を向けた

それでも貴方はいつものように腕をからませた

この愛が人生の一部なら一体何のもとに

誓いという言葉が存在しているのだろう

難しいことばかり頭が回る、回る、回る

ああ、別れというのは決して簡単なことじゃない

だけどいつか貴方は消えてくその時

さよならはどんな味がする？

たればなんて恋愛になくても 何故出逢ってしまったの

何故強引に貴方はあたしを誘って口説いてしまったの

誰かを傷つけたり裏切ることなんて知っていたでしょう

飲み込んでしまってもずるずるとあたしのせいかもね

そんな事はいいじゃないなんて貴方は

笑う、笑う、笑う

ああ 自分勝手 自由じゃない

もしあたしが切り出したその時

さよならはどんな味がする？

押し殺した涙のよう？

ああ 難しいようで簡単ね からまる解けない糸のようでも

バッサリハサミで切るように

あなたも経験したでしょう？

何故こんなに頭が回る、回る、回る

いいじゃないなんて 笑う、笑う、笑う

ああ 難しいようで簡単ね からまる解けない糸のようでも

所詮は禁断の愛だから

きっと苦くて染みるような

そんなさよならの味がするんだろう

誓いなんて永久にない

そんな勝手な愛だから

そろそろ口にするべきの

さよならはどんな味がする？

Runaway

季節が変わりゆくのが こんなに惜しいなんて

時間が止まらないのが こんなに切ないなんて

不思議な感情が伝う

今はまだどうかこのままで暖かなこの闇のなかで

光が差し込むまでこの腕の中にいさせて

朝が来たらきっと出ていくから

Runaway 次の約束はしない

君が行き来しているだろうその線路の先にあるもの

見えない未来を見つめて息を吹きかけてるのは何故

日ごとに空気の冷たくなる中まだいかないで

何度会えても 扉は開かないから

Runaway 朝が来れば同じ

肌のぬくもりはやがて白い景色にとけて

奪われていくものだから

Runaway 次の約束はしない

Runaway 夜も 朝が来ても同じ

どこか遠くへ きっと逃げたい

どうせならその優しきで胸の中に痕を残さないで

Runaway 次の約束はしない

one woman and one man

ぼやけた月明かり 薄らぐ蒼染めた朝

冷たい空気に誘われるがままに吸い込まれ

ボンネットに横たわると 空を隠したあなたの影

今何処までの果てない道を教えて

少しずつ高くなる太陽が窓に照り返す

このまま どこかへ Ah...

あたしたちはたったふたり

ひとりの男と ひとりの女

どんなに惹かれ合い 愛しても愛されても

結ばれない運命を知りながら

今はただ走るだけ 走るだけ

忍び寄るものも今は何もない

波の傍らの国道をひたすらなぞるだけ

出来ることならば ずっとさらいたいくらいに

狂おしいほど身体の中に熱がたぎる

叶わない夢ならば 未知の旅の終わりまで

このままだこかへ Ah...

あたしたちはたったふたり

ひとりの男とひとりの女

確かな意思で愛し合いひとつになれど

変わらないもの振りほどいて忘れようとして

今はただ走るだけ 走るだけ

海沿いの先 急カーブ あなたとなら

このままダイブしても構わない

他には何もいない

あたしたちはたったふたり

ひとりの男とひとりの女

どんなに惹かれ合い 愛しても愛されても

結ばれない

あたしたちはたったふたり

ひとりの男とひとりの女

確かな意思で愛し合いひとつになれど

変わらない運命を知りながら

今はただ走るだけ走るだけ....

今年の夏はもう二度と

あれほど暑かった 焼けつく太陽の季節

全ては輝いてそして 残酷に散った

子供のように二人はしゃいでいた絶えなかった笑顔

仕事や友達や、将来のことを

時を忘れて語り合った

信じてはだめよと忠告の言葉

周りにはあなたのことを そう言った

二人を不思議そうに思う 他人の視線とは違い

それでも私はあなたに溺れていた

それはゲームだったの

飢えていたあなたは私を利用した

やましい気持ちもないんでしょう？

朝日の差し込む部屋あなたがいた日は

こんなにも綺麗な夏が嘘のようで

言葉に出来なかったけど あなたが愛しかった

思い出なのね あなたが去った今は

あれ以上火が燃え上がらないまま

二人は争い醜い傷を作った

あなたのことをとても憎むほど

無邪気に笑っている あなたとすれ違い

それでも私は 交わす言葉さえもない

好きだったあなたの瞳と視線が合うたび

ナイフが心に突き刺さるよう

後悔しないわけにいかない

あれほど傷つけあう事はなかった筈なのに

ごめんねもう 誰のせいでもないのだから

決して罪をきせたりしない

多分お互いが上手くいくのには

大切であることが何か欠けていた

あなたが笑っている

流れてくる噂どおり

他の女性（ひと）のこと耳に入ってくる

もう何も出来ない 戻れない ただ今は

あなたをしばらくここでこうして見ている

こんなに近くに、近くにいるのに

遠く感じている

あなたを二度とは愛せない

これから誰かを好きになる

そしてこの夏を思い出す

それでももう二度と…

In a new city

僕は新しい街で振り出しに戻った

作り上げたものがまだ戻らない

でも空に恵みの朝を見るだけなんだ

今夜目覚める新しい街は

灯りを消しても眠りを知らない

様々な感情の中 未来に伝える

それがここで生きる証だとね

最下層の幻想と笑われ

それでも誇り高い理想を得る

だってその階段を昇らなければ

そのまま留まって終わってしまうだろう？

今夜輝く美しい星は

朝に飲まれ希望となるだろう

交錯する幸と不幸の街

それをここで見つめるのだろう

毎日精一杯生きて疲れて

毎日それがへとへとでも

炎が燃えて焼き尽くされて

達成感を得るだろう

今夜ぼくは目を閉じる

実現するために夢は作るものだ

眠っても眠りをしらないのは

ぼくがここで生きてる証

ぼくが伝えたい生きる魂

作詞

奥付

奥付

YUNA Lyrics/Yuna Kannami

<https://puboo.jp/book/102879>

著者：神波 由那

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/yunakan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/102879>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

YUNA Lyrics/Yuna Kannami

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
